

フイヒテの「我」の哲学について

二 宮 源 兵

私が何故フイヒテ (Johann Gottlieb Fichte, 1762—1814) をこゝに取り上げて論ずるかと言ふ理由は、彼が倫理学者であると同時に神学者、観念論者であると同時に實在論者、反省に鋭い思想家であると同時に実践に心引かれる實際家であるため、今日のように倫理的世界、観念論的世界、反省の努力から離れ、実践生活の領域にのみ興味をもつ社会に於ては、フイヒテの哲学は、多くの示唆を与えて呉れるからである。

フイヒテは、カント及びヘーゲルと共にドイツに於ける哲学者の最高峯であるが、一八〇七年フランス軍がドイツに侵入するに當つて、愛国の熱情止みがたく、“Reden an die Deutsche Nation” (「ドイツ国民に告ぐ」) をベルリン大学に於て講演し、次いで翌年之を出版して、ドイツ国民に非常な感銘を与えた如きは、彼が哲学者である反面、実践家でもある所以である。そして、彼の哲学を眺めることによつて、観念の世界と実践の世界、倫理の世界と宗教の世界の關係について一つの解決を見出すことが出来るのである。

一、当時の哲学とフイヒテ哲学の特徴

カントの批判哲学は、哲学史に一新紀元を劃したのであるが、このカントの批判哲学が抬頭した当初には、スピノザ哲学が復興してドイツ人に再認識されつゝあつた。カントは純理的批判哲学者であり、スピノザは独断的神秘哲学者である。そして、両哲学は、カント以後の大陸の哲学の二大主流をなすものであつた。これカント以後の哲学者は、多かれ少かれカントの批判的認識論並にスピノザの汎神論的神秘的哲学の影響を受けているからである。

フイヒテは、カントと同時代人であつて、直接カントより影響を受けたが、彼は寧ろカントより大胆な思想家であつた。即ち、フイヒテは、シェリングやヘーゲルと共に、カントが主張する「もの自体」(“Ding an sich”)の思想を超克しようとして、思惟を解放し、而して自己の精神を凝視してそこに無限な世界を発見したのであつた。フイヒテによれば、カントがその批判哲学に於て、現象界を対象とする純粹理性と、超越界を対象とする實踐理性とを区別したことは、カントの思想が統一的でなく、抽象的であり分立的であつて、統一原理を欠ぐ点である。一切の学は、原理によつて統一されなければならない。眞の学は、諸学の根底を求めることがその任務であり、而もかくすることは可能であることを指摘して、自明にして究極である学の存在を主張し、これを「知識学」(“Wissenschaftslehre”)と呼んだ。即ち、彼は、カントの實踐理性の優位の思想を徹底して、「我」(Ego)を一切のもの、規定原理とし、我の哲学を樹立することによつて、これを「知識学」と呼んだのであつた。フイヒテは、元來清教徒的改革者の人生愛好家であると同時に、單純素直な精神の所有者であつた。彼は、自らが受け納れる事の出来る一切の哲学思想を、我を原理とする倫理的並に宗教的思想に導いて来て、それを人々の生命にふれさせないではおかまいと云う情熱を有していた。

フイヒテの哲学は、彼のかゝる性格を以つて、カント哲学をスピノザ流に説明したと云うことが出来る。スピノザ流の説明の仕方とは、我の原理を大前提として、一切の思惟を証明的に説明しようとする演繹的思惟の方法を云う。かような意味に於て、彼の哲学は、「カントの言葉をもつて表現されたスピノザ哲学」「逆転せるスピノザ哲学」「觀念論的スピノザ哲学」などと呼ばれている。フイヒテに取つては、哲学は、人格に関する問題であつて、人間性(Menschenheit)を探究することを目的とする。この人間性の探究に志すものは誰でも、人間の心に二つの異なる種類の觀念が存在していることに氣附く。この二つの觀念の衝突が哲学の問題を提供するのである。この二つの觀念とは、一つは物理的世界を統御する必然的法則に律せられる觀念であり、他の一つは個人意識に基づく所の偶然な自發的觀念である。然らば、これら二つの觀念の中何れが本源的であるか。哲学的思惟の解決並に哲学的興味の満足は、その一つを

他に従属させる事によつて達せられるのである。偶然な自発的觀念を必然的法則によつて律せられる觀念に従属せしめる哲学者の思想を、フイヒテは独断論 (Dogmatismus) と呼んだ。スピノザは、この種の哲学者であつて、フイヒテの満足することの出来ないところのものであつた。必然的法則によつて律せられる觀念を偶然な自発的觀念に従属させる哲学者の思想を、彼は觀念論 (Idealismus) と呼んだ。フイヒテは、後者の立場を取り、この方向へと彼の反省と思索とを深めて行つたのである。

二、フイヒテの觀念論

フイヒテの哲学思想の發展の跡を追つて見ると、彼の初期の思想は、独断論若くは必然論に閉じ込められているスピノザ哲学の流を汲んでいる。彼がカントの「純粹理性批判」を読むに及んで、その思想に一大転機を生じ、觀念論を主張するようになった。彼は、次のような結論に到達した。必然的法則の下にある世界は、意識の創造による所のものである。意識は、決して必然に生起する事件即ち必然的法則の下にある世界に従属するものではない。世界は、人間の意識活動を決定することも亦強制する事も出来ない。経験の世界に於ては、人間は世界によつて支配されたり強制されたりすることがあるが、然しそれは眞の支配でもなく強制でもない。彼は、その著「人間の天職」(“Bestimmung des Menschen, 1800”)に於て、人間意識の活動と發展とを次のように述べている。

先ず第一に、人間は、世界に於て必然的に生起する現象を単に目撃する。第二に、人間は、生起する一切の現象が単に仮象的であつて、實在性を有するものは何一つ存在しない事を知るようになる。第三に、人間は、現象そのものの中に眞理を見出す鍵を発見する。即ち、現象界に存在する人間自体を見つめる時、人間の中に必然的法則に依つては律し得ないもの、即ち「義務」(“Du mus”)の事實の存在する事を知る。義務を断言的命令として遵守することは、必然的法則によつては律し得ない所のものであり、超現象的なものである。かゝる義務を内に蔵している事は、人間が現象を超越して超感覺界の消息を直観し得る所以である。こゝに哲学的思索の旅は、先ず現象界に出発して、遂に超越界に

到達する事が出来ると云うフイヒテの思想が現われている。これは又、フイヒテの思想がカントに發して、遂にカントを超越する事を示している。

三、「我」(Ego)

フイヒテ哲学の中心問題は、上述の如く、必然的法則に制約せられる自然界と、自由な自我意識との二元論を調和することにあつた。この二元論の調和は、先づ自己の内的葛藤を内観することによつてなされる。換言すると、この問題の解決は、自我意識即ち私の探究によつてなされる。然らば、我とは何か。我は、悟性 (Verstand=Understanding) でもなく、不変なもの (Unveränderlichkeit=Unchangeableness) でもなく。我は、活動 (Thätigkeit=Activity) であり、意志 (Wille=Will) であり、生活力 (Lebens-Kraft=Living-power) であり、事行 (Thatundlung=Doing) である。我の本質は、「事行」と云う言葉で最もよく説明される。事行とは、我に於ては、知るもの (認識の主体としての自己) と知られるもの (行為者としての自己即ち認識の対象となる自己) とが一つであるが、かく知る自己が知られる自己であり、知られる自己が知る自己である無限な作用の連続、即ち我が無限に自己の中に転入する作用の連続を意味する。これ、カントの「目的の王国」 ("Reich der Zwecke") の思想を説明し変えた所のものである。

然らば、私は何故にかゝる自己転入の作用を営むか。これ、私の活動は、當為 (Sollen) であるからである。即ち、私の本質は、我自体が無限に自己の中に転入する必然性、當為性、自律性を有するからである。更に言い換えると、私の本質は、無制約的であつて、己が性質から自律的に行動を發するからである。かくの如く、私の本質は、當為であり、道德的義務であり、自由であり、意志であり、生活力であり、事行である。

かくの意味に於て、フイヒテの思想は、我を本質とし根源とする一元論になる。彼は、私の世界と自然界との二元論的存在を想定し乍ら、その自然界を私の當為的自由活動の中に包摂して、一元論の世界觀に徹したのである。彼にとつては、實在は、自己(我)の中にある。自己を離れて独立に存在する實在はあり得ない。生活力であり、當為であり、

自由である自己即ち我こそ眞の實有であり、人生の原理であり、根源である。

私の活動は、次のような内容を帯びている。我は、その中に矛盾律を含み、その矛盾律の故に我自らが發展躍進するのである。私の自意識は、常に或る他者の意識を含んでいる。即ち、我は、それ自体を「指定する」(“Setzen”)と共に、「非我」(“Non-Ego”)を指定する。換言すると、私の事行に於ては、知るものとしての我と、知られるものとしての我とが対立する。知るものとしての我は、低い我を統一する高い我であり、「純粹我」(Reines-Ich)であり、「絶対我」(“Absolutes Ich”)である。知られるものとしての我は、低い我であり、現象界とつながれる我であり、人間經驗を含むところの相対的我である。而して、我が眞の活動をなすためには、即ち我が眞の我であるためには、我自体が非我との対立を意識する(非我を指定する)と同時に、我が非我を完全に統一する(我を指定する)境地を得なければならぬ。この我が指定されることによつて、我は一段高い我へと躍進する。一段躍進したこの我は、更に事行の作用を反復して、より高い我へと無限の躍進をするのである。この意味に於て、非我(客觀界)は、私の自己活動の所産、即ち我が自己をあらわすところに始めて存在するのである。「我は我であるから我を知るのである。即ち、我は我であることを自ら知ることによつて、我は眞に存在する。故に、主觀と客觀とのつながりを必要としない。兩者のつながりは、我自体である。即ち、我は主觀であつて同時に客觀である。而して、この主觀的客觀即ち自己認識の還元こそ、「我」(Ich=I=Self)と云う言葉で表わされる所のものである」(Bestimmung des Menschen, Eng. tr. by W. Smith P. 66)

右に述べたように、私の本質は、矛盾を含んでいる。我は、真我(我自体)を認識しようとして、却つて真私の認識を否定しようとする。即ち、私の活動は、我自体の中に存在する非我によつて制約を受ける。我は、この非私の制約を打開しようとして自己争闘を演じ、その争闘を反復し乍ら無限に自己の中に転入するのである。この發展的自己争闘が、眞の人間の姿であり、人生であり、道德的生活である。この發展的自己争闘を経験することが、眞に実在することである。

この發展的自己争闘を経験するところに、弁証論 (Dialektik) が成立する。即ち、我の發展的争闘は、正、反、合の三段階を経て無限に發展する。

正 (These) は、絶対我の必然的要求より起り、我の存在そのものを意味する。

反 (Antithese) は、我の自律的必然的活動から発する所のものであり、我と非我との対立を意味する。

合 (Synthese) は、我が非我を統一して調和を得た状態を意味する。

この合は、他の新しい反に對する新しい正となる。かくして、我の發展的争闘は、無限に反復されて向上し行くのである。かような我の發展的争闘を経験するのなければ、人は真に実在すると云えないのである。フイヒテのこの弁証論は、シェリング及びヘーゲルによつて形而上學に適用された。

四、道德的世界觀

世界は、我の活動によつて創造された理性体系である。フイヒテは云う、「我以外のものに關する意識は、我自体の表現能力の所産に外ならぬ」 (Bestimmung des Menschen, Eng. tr. P. 82)。この意味に於て、彼の思想は、主觀的觀念論 (Subjektiver Idealismus) と呼ばれる。この思想からすれば、カントの「物自体」 ("Ding an sich") の存在を認める思想は、意味を有しないことになる。フイヒテの言葉によれば、「凡ての知覺に於て、人は自己自体の状態のみを知覺し得る」 (Ibid. p. 39)。フイヒテとカントの思想の根本的相違はここにある。カントは、ものの本質は、主觀を離れて独立した客觀的なものであると考え、フイヒテは、ものは主觀の產物即ち我の活動の所産であると考えた。我の活動は、當為 (Sollen) をあらわし、且つ自己の活動を反復し、反省し、回想する。我の自己活動の認識は、感覺的認識から完全な理性的認識へと段階を追うて進んで行く。フイヒテに取つては、感覺さえも、我の自由な活動に外ならないのであつて、外なる他物によつて觸発されるものではない。感覺は、一見するところ、「与えられたもの」 ("Gegebenen") であるように見える。然し、感覺は、人格の活動の根源の形式である我の無意識な自己決定にほかならない。然

るに、カントによれば、感覚の根源は、「もの自体」にあるのであつて、いわば客觀的事物によつて觸發されるところのものである。こゝに、フィヒテとカントの思想の相違点があり、フィヒテがカントの「もの自体」の思想を超克した点がある。

世界観に續いて起る問題は、自然現象の説明である。右に述べたように、世界は、私の活動の所産であり、我自体が客觀世界の存在を意志するものであると云ふこと、同じように、自然現象は、私の目的論的活動の所産である。自然現象は、あくまで機械的体系ではなく、連鎖ある合目的理性的活動の体系である。自然現象の中に存する必然性は、物理的因果的必然性ではなく、目的論的必然性である。それは、個々の現象を互に連続する必然性ではなく、個々の現象が我に結びつけられる必然性であり、全現象が我によつて統一せられている全体系に結合せられる必然性である。この目的論は次のようにも言い表わすことが出来る。一つのは、或る他物の存在によつて存在あらしめられるものではなくて、或る他物が存在し得るために存在するのである。この表現を我と他物との關係について言えば、一つのも、存在は、他の何ものによつても説明の出来ないものであつて、私の存在によつてのみ説明することが出来るのである。

五、道德的神觀と人間觀

道德的存在者としての人間は、義務を遂行すべき存在である。人間の周囲に生起して常に人間を困惑させている現象は、人間が義務を遂行するに當つて起つて来る偶然事にすぎない。既に述べたように、世界は、因果關係によつて構成されている機械的体系ではなくて、精神的争闘によつて、目的若くは義務を遂行しようとする目的論的手段の体系である。歴史も亦、人間が己が私の活動によつて創造したところの精神的争闘の遺産である。実に、人間は自ら、己が活動の劇作をなすと同時に、夫れを演ずる舞台を自ら創造する。客觀的實在並に歴史は、人間行為の原因ではなく、却つて、人間の私の活動によつて創造される所のものである。存在するところのものは凡て、當為によつて説明さるべきものである。世界、人生は、道德的我活動の劇場である。かくの如く、人間は、道德的存在として考えられるのである。

が、神の觀念も亦道德的意味を有している。神は、「実有」(“Substanz”)即ち關係的存在物の全体ではなく、「存在する」(“Sein”)或るものである。神は、普遍的道德的過程であり、道德的秩序である。神は、普遍的我であり、自由な活動であり、世界を創造する活動である。この神に対して人間を考えると、人間の真我は、道德的過程であり、道德的秩序である。従つて、人間の存在は、神の存在を予想している。かゝる意味から、神と人間との關係を次の如く言うことが出来る。人間は、神の一部分であると云うよりも寧ろ人間は神である。「絶対我」である神は、人間の有限な我の中にそれ自体を顯現している。人間の活動の中に、神自らが活動している。人間は、神の戦を戦いつゝあるのである。神の勝利は、人間の勝利によつてのみ克ち得られるのである。実に、人間の勝利なくして、神の勝利はあり得ない。人間の活動、人間の尽すべき義務は、神の活動、神の義務、神の声である。この活動、この義務を完遂し、この神の声に完全に聴き従ふことによつてのみ、人間は眞の人間であることが出来るのである。実に、人間が「自ら」(我)を考える事は、己が義務を考えることであり、義務を考えることは、神を考えることである。人間が、自己認識を深めるならば、その自己認識の深さ丈け、宇宙の真理即ち神の認識を深めることになるのである。歴史は、かゝる我の認識を深めようとする人間の自己發展若くは道德的秩序の發展の記録である。即ち、歴史は、有限である我が、無限であるうとし、普遍であろうとする争闘の記録である。かくの如く、満たされていないものを満たそうとし、不完全なものを完全たらしめようとし、未了の義務を完了しようとするのが、人間の本質である。

後記。右のフイヒテに關する小論は、左記のフイヒテの二書並に若干の哲学史に拠つたものである。

System der Sittenlehre nach den Prinzipien der Wissenschaftslehre, 1798.

Eng. tr. The Science of Ethics, by A.E. Kroeger

Bestimmung des Menschen, 1800.

Eng. tr. Vocation of Man, by W. Smith.